

■■ 1-12 ■■ == =>鳥の話

1. 私の生まれたのは東三河の一寒村であるが、久しく村を離れていて、ときおり訪れて見ると、そこに以前とは著しい変化の痕が眼につく。ただいまではどこの家でも、納屋の隅や雪隠の脇などに、竹や金網で囲った鶏舎が設けられて、アンダラとかレグホンなどという洋種の鶏が飼われているが、三〇年前、私などが育つ頃には、こうしたものはさらに影もなかった。鶏はいてもいわゆる放し飼いで、どこの家にも一つがいかあるいは三羽ぐらい、土間の隅や表の端などに遊んでいたものである。今日のように、卵を買う費用を他の途で稼ぎ出せば、糞ばかりして汚い鶏などはいらぬという類の理屈はまだ通らなかった。

2. 家がある以上、付属物のように、生活上なくては叶わぬほどの地位を占めていた鶏で、飼っているというよりも、いたという方がはるかに適切であった。私の家などでおく鶏の品種はおのずと決まっていた。”みのひき”というて、腰のところに蓑を着けたような長い羽毛を垂らしてい

る。黄金色の勝った体の細い、^{とさか}鶏冠の美しい鶏であった。それがあるとき雄を鷹に捕られてからは、どうしても以前のように美しいのを補充出来なくなった。父がそれを気にして、幾度か鶏屋を招んで取り替えさせたが、表に



立って餌をついばんでいるところなど、見るともなしに眺めると、やっぱり真正のみのひきではないと言ってこぼしたものであった。どこかに異なった種の血が混じっていたのである。

3. 直ぐ隣の家には、代々小鬪鶏^{こしゃも}というのがいた。体の小締りに締まった、鶏冠の固い鳥であった。親鳥が年老って代を替えても、以前のと区別が出来ないぐらいよく似ていた。よく主人の気性を受けて、強情張りで喧嘩に強いという評判であった。でも美しい鶏であった。

谷一つ越した下の屋敷には黒の矮鶏^{ちやぼ}がいた。全身濡羽色して、脚の白い、鶏冠が際立って紅い、絵のような姿をしていた。土間に米俵など積んである家で、その上^{にわ}につがいで遊んでいるのが際立って美しかった。にわとりだから土間にいるもの^{にわ}などと、その家の婆さんが教えてくれた。その婆さんが、ある時鶏のつがいを描い

てくれと、半紙を持って私に頼みに来たことがあった。その絵でもって荒神さんに御願を果たすのだとあって、真っ黒い大黒柱に私の拙い絵が永いこと貼ってあった。そのとき荒神様は鶏の遊んでいるのを一番喜ばれるのだと聞いた。村のどこの家を訪れても、美しい紅や青の絵に描いたような鶏がいたものであった。氏神の社の下の家には、抜けるように白いつがいがいた。こうして鶏といえば美しいもの、声のよいものと思いこんでいた。そうして子供心にわが家の鶏が一番優れていると信じていた。

4. その頃はまだ村に時計が普及していなかったもので、鶏がなくては一日も送れなかった。昨日鶏を狐に奪られたために、時刻を間違えて、ひどい目に遇ったなどの話もあった。そんなわけかして、鶏の巣といえば土間の向う正面の厩の上と決まっていた。黒い土止り竿が宙に横たわって、その下に糞除けの筵が吊るしてある。夜など大戸を跨いで土間に脚を踏み入れると、厩の馬の顔の上から鶏が覗いていた。朝になって大戸の隙が明るくなると、第一に雄鶏がばたばたと舞い下りて、先ず土間の中央で勇ましく羽敲きして関をつくる。

朝起きて一番に土間を掃くものこれなめに、などという謎は、どんな子供でも知っていた。雄鶏が朝起きて羽敲きして関をつくるのは、その一日の魔障を祓うのだとも聞いた。年の暮の煤払いには、鶏の巣も下して糞を除け、新しい吊縄に取り代える。

5. 鶏はまた目出度いものともいうた。昔某の名高い絵描きに、この世で一番見事なものを描いてくれと所望したら、宜しいと答えてすらすらと描いて出したのは、萱葺屋の棟に雄鶏が関をつくっている図であった。それとは逆に醜いものというのと、雪隠の屋根に南瓜が這い上がった図であったそうな。家棟に雄鶏が上っている絵様の美しさは、村の誰もが共通に感じ異存のないところであった。あるとき母につれられて隣村を通った時、一番高みにある家であったが、白壁造りの主屋の棟に、雄鶏が上っていた。それを母に指されて、子供心にしばし見惚れたものであった。ここでは屋棟に十文字に組んだ木を矢筈といった。

6. 鶏は神様のお使姫と聞いていたが、それを如実に識る機会もまだ遺されてあった。冬のことで隣家に風呂に招かれた際であった、順番を待つ間炬燵にはっていると、突然厩の下で鶏が二声関を作った。あれっと思って驚いて鶏の巣の方を見返したとき、家の主人が血相変えて立ち上がって、鶏を下せ鶏を下せと主婦に急ぎ立てた。やがて梯子を持って来て巣から鶏を抱き下した。鶏の宵鳴きは不吉の前兆であろう

と、居合わせた一同不安を抱いた。長男が急遽提灯に火を入れて、村の修験者の家へ飛んで往った。その後で主婦が柵に白米を入れて来て、きょとんとしている鶏の前へ、叮嚀にお辞儀してから「よく知らせておくれました」と述べながら、米を撒いて与えた。修験者へ往った長男は未だ還って来なかった。

7. 話が変わった方向へ飛ぶが、鶏が水を呑む恰好が幼ない心に物珍しくて、それを真似てひどく叱られた記憶がある。母屋の脇の雪隠に近い処に南天が一株あって、その傍らに苔の着いた手水鉢が据えてあった。それへ鶏が上って水を呑む。一口含んでからぐっと高く頸を上げて嘴を細かく動かして飲み込む。それが物珍しくて、あるとき手水鉢に両手を置いて、鶏のするようにじかに唇とつけて一口含んでから、顔を空に向けて口を動かしながら呑んだのである。

鶏に対する詞なども、たしかに親しみのあるものであった。呼ぶときはココココと、鳥のように口元を尖らせて、掌を前に出したりした。しかつめらしい爺さんなどの、そうした恰好を思うと、なるほどああもあろうかと、今思うても感心させられるほど親しみ深い。それとは反対に、叱って追う時は、かならずポーまたはポツと言えと、祖母から教えられたものであった。シツとかショウなどというのは、年老った人ほど用いなかった。むやみに大声を挙げて、ウワッなどと怒鳴って、嗜られたこともたびたびあった。あるときそれをやると、縁側で綿を繰っていた祖母が、たとえようのない表情をして吹き出したものである。よくよく度し難い処置なしとでも言った顔つきであった。

8. 鶏に対する詞や態度も、まさに変わろうとしていた時代であった。種々の点で、家とは離れ難いものになっている一方、眺めるものでもあった鶏が、近頃の卵本位の汚い鶏に変わったそもそもの初めは、村では黒の矮鶏を飼っていた家であった。体全体がぶくぶくと変に肥って、薄汚い灰色をした、その上脚にまで毛が生えているコウチンという鶏で、はじめて見た目には鶏らしく思えなかった。人間で言えば遠い他国のならず者でも連れてきたようで、それが鬨をつくる声を聴くと、自ずと嘲笑でもしたくなった。あんな鶏の卵は、呑むのも穢らしいなどと、子供同士で語り合ったが、当時は少しくらい腹痛があっても、鶏卵の一つも呑んですましておくという状態であった。

9. 地鶏と洋鶏の優劣論がわれわれ少年の耳にはいったのもその頃で、子供同士学校の行き還りによく論じ合ったものである。村のある物持ちの主人が久しく虚弱でいて、ある日父と向い合ってその論をやっていた。コウチンの卵などは、いかに

巨きくてもさらに効験を感じないが、そこは地鶏の卵で、三、四日も続けて用いると、こう坐っていても、自ずと掌の裡に脂肪が浸んで来ると語っていた。中にはまた、地鶏の卵は呑んで三歩歩くうちに効験が現れるともいった。こうした靈薬以上の賛美を受けたのも、実は鶏卵を薬餌に用いて日が浅かったからで、言わば物珍しさからであった。しかしそれも束の間で、村には軒ごとに洋種が殖えていった。

10. 洋鶏を飼うようになって、第一に必要な迫られたのは鶏舎である。体が小さくて食欲も細い地鶏と異なって、卵を多く産む代わり食欲も旺盛な洋鶏を飼うと、屋敷廻りの麦畑や菜畑から緑の影が消えて行く。あの鶏めは青いものならただの草でも食うなどと悪く言い言い、にわかには鶏舎を作らねばならなかった。それで名称も早速にトリマヤというた。鶏を容れる厩であった。既に容れておく鶏なら汚くても文句はなかったのである。

11. あたかもその頃であった。川向の村の物持ちが零落して、門構えの家を畳んで、街道傍の石屋根の家に移転して、こともあろうに鶏舎を始めた。職業として将来性を認めたかもしれぬが、何としても人柄にふさわしくなかった。鶏籠を天秤棒に引っ掛けて家々を廻っていた。その人が肺を患っていた私の姉に、地鶏の生血をのむことを熱心に薦めるのには驚いた。俺が採って差し上げると言って、籠から掴み出した雌鶏を、土間の隅の藁打ち台に持っていった。家の者は見るのが厭だというわけで、上り端の障子を閉め切った。左脇に鶏を抱えて、頸を藁打ち台に据えると、鉈を把ってさっと断ったのにはびっくりした。どくどく流れる血を手早く湯呑みに溜めて差し出したが、誰もこれを受け取ろうとはしなかった。最後にもったいないからとあって、私のところに廻って来た。湯呑みを受け取って、目をつぶって一気に呑んだが、塩気の勝った味が強く舌の端に残った。今懐うても慄然とするその場の光景であった。

12. 地鶏の姿はこうして一つ一つ消えていった。よくよく亡びさる時世であったのだ。村で最後まで放し飼いの地鶏を保存した私の家でも、いつかアンダラという黒鳥に変わっていた。鶏を飼う以上、年間に幾つというほどしか卵を産まぬ地鶏などはばかっているというように、村の人々の思考にも大きな変化が行われていた。卵買いという職業が、新たに登場したのも、実はその頃であったように思われる。

家が無人で鶏の世話も容易でないからと、いったんはなくしても見たが、流し元の残り物や、こぼれた穀物がもったいないという老人の説を容れて、ふたたび二羽三羽ぐらいおくことにした。

鶏の巣が既の天井から、納屋や雪隠の脇へ移されたのも、当然の推移であった。卵を得る以外、他に何の期待も必要もなくなれば、声の良し悪しや姿恰好などは問題ではなかった。たくさんに餌を食べて、一個でも多く卵を産むように、お尻が丸々と太っているほど要求に適っていた。汚いことは先刻承知であって、それにはなるべく目立たないところが似つかわしかった。鶏の姿が友禅やメリンスの花模様から、実用本位の毛糸細工に代わってから、村の人は多く朝寝になったという。時代の変遷によるのは言うまでもないが、あの声と羽毛の美しい地鶏がいなくなってから、村の生活は美しさの点で、以前に較べて遥かに劣ったように思われる。